第3種郵便物認可

あの夏 1961年 準決勝 浪商×法政二 1

「怪童」尾崎、雪辱の第3幕

1961年8月19日 準決勝 第1試合 時間 2時間24分(12時00分～14時24分) 審判 山本英/中村/松本/吉岡

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計	盗塁	失策
浪商	(大阪)	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2	4	0	3
法政二	(神奈川)	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	2	2

得点打

浪商 竹内啓監督(29)

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
(遊)	金井 義彦 3年	右飛		死球			三振			死球		右安
(三)	大熊 忠義 3	一ゴ		三邪			一邪			二ゴ		遊野
(二)	住友 平 3	中安			三ゴ			遊直		中安		二ゴ
(一)	前田 周治 3	投ゴ			三振			投ゴ		三安		中安
(投)	尾崎 行雄 2		投ゴ		三振			右飛		左安		右犠
(捕)	大塚 弥寿男 3		中飛			遊飛			二飛	遊ゴ		三ゴ
(左)	高田 繁 1		三振			左飛			三ゴ		左飛	
(右)	脇田 政治 3			一ゴ		遊飛			一ゴ		左飛	
(中)	岸本 満 3			三振			三振					
打	東海 清次 3									二ゴ		
中	吉田 敬一郎 3										中飛	

法政二 大谷英博監督(22)

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
(中)	的場 祐剛 3年	右安		投ゴ		三振			一飛		三振	
(右)	五明 公男 3	二ゴ		右安		右飛			中安			二失
(投)	柴田 勲 3	三ゴ		右安			右飛		右飛			三振
(三)	是久 幸彦 3	左安			四球		右三		三ゴ			左飛
(左)	内田 宏行 3	三振			捕犠		三飛			三直		遊安
(一)	原田 忠男 3		左安		右飛		右直			三振		
(二)	増山 光洋 3		三振		右安			三失		二ゴ		
(捕)	関根 誠二 2		三振		三振			二併			三振	
(遊)	長島 武光 3			投飛		捕邪		中飛			投ゴ	

尾崎投手

投球回	11
打者	41
被安打	9
奪三振	9
四死球	1
自責点	1

柴田投手

投球回	11
打者	42
被安打	6
奪三振	6
四死球	2
自責点	2

1960年8月16日 2回戦 第3試合
時間 2時間19分(15時00分～17時19分)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
法政二	0	0	0	0	0	0	0	4	0	4
浪商	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

1961年4月3日 準々決勝 第3試合
時間 2時間10分(15時11分～17時21分)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
法政二	0	0	0	0	2	0	1	0	0	3
浪商	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1

勝ったチームがその大会で優勝している

第42回大会を制した法政二の選手たち。前列左端は田丸仁監督(1960年8月21日)

第43回大会を制した浪商の選手たち(1961年8月20日)

グラフィック・秋沢 祐磨

浪商のエース 尾崎行雄

2010年のOB戦で握手する尾崎行雄(左)と柴田勲

法政二のエース 柴田勲

「怪童」尾崎という投手は、ある世代、そう60歳以上の人たちにとっては特別な存在だ。

「速いだけでなく、ボールが重い。あんな投手はほかにいない」。対戦した打者は主張し、ファンは「映像を解析したら、球速が160キロを超えていたらしい」などと自慢する。「甲子園で1番すごいボールを投げた投手は誰か」という企画では、たいてい1位。15年前に関係者に質問して回ったときは、2位が江川卓(作新学院)か松坂大輔(横浜)という感じだった。

尾崎は1960年、大阪の強豪校・浪商(現大体大浪商)に入学。4月3日の公式戦に、早くも登板した記録が残っている。評判を聞いた大学生の先輩捕手が「わしが捕ったる」とグラウンドに来た。「高めの直球。先輩のミットに、かすりもせん。ボールはグイーンッと伸び、そのままバックネットを直撃したんや」。バッテリーを組んだ大塚から聞いた話だ。

61年夏、2年生エース尾崎を擁する浪商は全国制覇を果たす。「怪童」は大阪大会から甲子園まで12試合を投げ、わずか3失点だった。その秋、浪商を中退してプロ入り。本来なら高校3年生の年に、東映フライヤーズで20勝して新人王に輝いた。

その「怪童」をして、どうしても勝てないチームがあった。神奈川代表の法政二だ。60年夏は2回戦で0―4、61年春は準々決勝で1―3と逆転負けした。法政二は両大会を制した。当時の法政二を、「高校野球史上最強チーム」と呼ぶファンは多い。

浪商は戦前の26年に初めて甲子園に出場し、すでに夏1度、春2度の優勝経験を持っていた古豪だ。法政二は戦後の52年夏に初出場し、メキメキと頭角を現していた。

法政二を育てた田丸仁監督は、57年に日本語訳が出版された「ドジャースの戦法」(アル・キャンパニス著)をチーム作りに生かした。当時の日本ではまだ一般的でなかったチームプレーやサインプレーが紹介されていた。

川上哲治監督率いる巨人がドジャースのキャンプで戦術を学んだのが61年だから、それより早かったことになる。

法政二のエースとして夏春連覇の原動力となった柴田は62年、巨人に入団。1番センターとして9連覇に貢献する。「巨人のミーティングはほぼ知っている内容だったね。田丸さんにたたきこまれていたから」と笑う。

雨の日は教室で野球ルールの勉強をした。「一字一句間違わずに答えないと、連帯責任で先輩から罰を受けた」と2番打者の五明。だから、授業中や電車の中で必死に暗記した。

一方の浪商は、「ボールを怖がる選手は使ってもらえなんだ」と副主将の岸本。首より下に来た内角球から逃げると、「ドアホ! 当たらんかい」と竹内監督に叱られた。

「まず根性と体力を身につけ、それから野球を体で覚える。そういう学校やった」と二塁手の住友。頭髪は青光りするような五厘刈り。「法政二はスポーツ刈りや。柴田なんか、もみあげも長い。腹がたつけど、格好ええんや」と三塁手の大熊はおどける。

何もかもが対照的な「東西の横綱」の対決は、ファンを熱狂させた。

1961年8月19日、準決勝。3季連続となる両雄の激突は、「東の横綱」の先制パンチで幕を開けた。

(このシリーズは編集委員・安藤嘉浩が担当します。敬称は略します)

スクラップブックはASAで

全国高校野球選手権大会の名場面を振り返る「あの夏」の第3シリーズ、1961年夏、第43回大会準決勝の「浪商―法政二」は、8月2日まで計30回(火～土曜日に掲載)を予定しています。

専用スクラップブック(無料)も好評です。紙面と同じサイズで印刷可能となる「原寸プリントサービス」はデジタル版で始まりました(会員登録が必要)。使い方は専用ページ(http://t.asahi.com/el6w)をご覧下さい。スクラップブックのお求め、お問い合わせは、お近くのASA(朝日新聞販売所)へ。